

呼 瑪 の 日 食 (2)

公文 武彦・高倉 正明

1 呼瑪への道(續き)

27日夕刻無事北安鎮着。雨あがりの泥濘に大事な機械を両手に抱いて馬車に揺られながら No. 1 北黒ホテルに入る。烏譚がましき No. 1! たてつけの悪い——酷寒負50度に凍つた壁が此頃やつと融けて来た爲でお歸りには立派にしときますでござぬますからハイ——襖は一旦開いたら仲々閉まらうとしない。娘さんよ無理して家の方を毀さない内に止めとき給へ。お風呂へどうぞと勧められたものの、ここは名にし負ふ悪水の土地。花山の水に鍛へられた吾々も敬遠する事にして先づ飯。それから北安鎮視察に馬車を呼ぶ。流石にこの邊の夜は寒い。合服の下にジャケットを着込んで猶ほ身震ひがしたのは、昨夜この通りにピストル強盜が出た故でもないらしい。軒を並べた鴉牙零賣所の軒燈が淡く灯つて居る。

28日早朝出發。火車は漫々的に北に進む。緩やかに起伏する草原に白樺の幹が美しく獐(鹿によく似てゐる)の群も珍しい。清溪(驛名)以北は寫眞の撮影を禁じられてゐるのでカメラに蟄居を申し渡す。この驛を出た所で尾の長さ1米もあらうと思はれる狼を追ひ越す。孫吳(この邊で生水の飲めるのは此處だけの由)では一

同驛長室に水の無心を申出る。永久凍結層を通つて來る水は齒にしみる位冷い。此處からはブラインドを下して、外を眺める事も禁じられて、寢て仕舞ふ。暫くにして“アムール”の畔なる國境の町



北安出發の一行 向つて右より荒木隊長1人おいて千田、公文、新城、他はホテルの人達(高倉寫)

に着く、名は^{タヘイホク}大黒河。航政局、領事館の方々の出迎へを受けて宿に入る。雨に烟る露都ブラゴエ市を望めば河を越えて来る晩鐘の音が淡い旅愁を誘ふ。夜に入つて兩脚漸く繁く、明日の苦勞が思ひやられる。

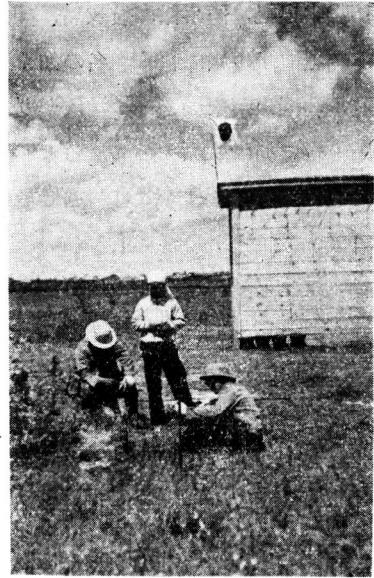
29日雨を衝いて荷物を積込む。正午發の豫定が少々遅れて(處は滿洲なり)16時半出帆。領事館、航政局、觀象臺の方々の見送りを受けて愈々最後のコース黒龍江の旅に執く。名の如く正に黒い。松花江あたりの濁つた水と全く違ふ。流水がやつと終つたばかりで殊にひどいのだ相だ。大朝の特派員堀氏が一行に加はり賑やかになる。船は思つたより大きく約千噸。但しそのケビンの臭い事。これで3日が過せるかと少し心配になる。殊に吾々の部屋の暑い事。ポイラーの直ぐ上らしい。兎も角デツキに上る。兩岸、殊に蘇領の美しい景色を眺めながら船は可成りのスピードで流れの早いアムールを遡つて行く。時々トチカが、一度は装甲自動車までも見受けられたが、差し迫つた空気も感ぜず、寧ろ河邊に遊ぶ子供や馬にもエキゾテイツクな物が感じられて何時までも見倦まない。夕食は純滿洲食。韭、大蒜にはいささか閉口する。白酒が唇に熱い。ケビンの暑さに夜半に起きてデツキに上れば、美しい月に送るか、滿人の胡弓のうら哀しい音が河面を流れて行く。

30日起きて見れば立罩めた霧の中に船は停つてゐる。航路標識の見えない限り船は動かないんだ相だ。豫定より1日早く明日の午頃には呼瑪につくらしいとの事。

31日碼頭に出た澤山の——呼瑪の大部分かも知れない——人達の歓迎を受けて上陸する。吾々の宿舎に當てられた建物は思つたより善く、新しく藁を敷いて貰つて南京虫の心配も先づ解消。荷物を大體片付けて縣公署に向ふ。約1籽。赤煉瓦の仲々上等の代物。縣長、平山、中川兩參事官と挨拶を濟ませてビールに寛ぐ。夕方は縣長の招待で滿洲式の晚餐に舌鼓を打ちつつ歡談する。今日はぐつすり寝て明日から仕事だ。

呼瑪は人口約300であるが清朝時代には黄金景氣に1萬、露國との通商も盛んで頗る殷盛を極めたものであつた。結構な縣公署。だだ広い町の面積、縣公署の横手に掘られた大池に浮ぶ浮水堂が當時の模様を偲ばせる。町の北縁^{アムール}は黒龍江で昔時より打續く民族鬭争の血を浮べて、一見無事平穩な中にも氣のせいかならぬ氣配がする。呼瑪碼頭の對岸は陸續きの小島と云つた形で

一面に樹木が生ひ茂つて、あちこちからゲ1ペ1ウ1の眼が對岸を監視してゐて、呼瑪の狀況が手に取る如く分つてゐるさうである。黒龍江を越えて遙か東から北の露嶺に渡つて山々が連なり、西北方の滿嶺にも低く興安の山々が延びて、オロチオン族の住むあたりも僅かに2, 30支里の所にある。縣當局の御厚意で宿舍も食事も満點。愈々呼瑪原頭に我等の活躍は始まる。先づ地磁氣の觀測小屋の建設。わざわざ黒河から呼びよせた大工が作業に取りかかる。敷地は我々の宿舍からは5町許りも距たつた縣公署の隣で、境界も無い野原である。工事は中々に進捗せず、日中は烈日赫々として丁度内地の眞夏であるが、黒樺の枝を揺つて吹く風は涼しい。午後になれば定つた様に入道雲が現はれて遠近に雷音が聞える。1日の勞働をして宿舍に歸ると、定つた様に縣參事官が來訪して一同を慰めて呉れる。6月4日の夕方に滿軍監視隊長以下將校數名來訪せられて種々の漫



一休み (山本夫人寄贈の日章旗觀測所に續く)

談に花が咲く。匪賊討伐の話、黒龍江氷上の陣中交歓、全く身命を度外視した其の勇敢さには一座傾聴する。2時外は既に全く白け渡つて南天に低く月さえて鶏鳴が聞える。話は中々盡きぬ。冬期橋に乗つて山路を行くと、突然狼群數百の襲來を受ける。日本刀を正眼に構へて之に對抗すると、狼群は次々に咽喉元をねらつて頭上を跳び越えて後足で後頭部を蹴つて行く様は、宛然腹切跳躍、いくら切られても襲撃を止めぬ。之の時生じつか腕を振つて一頭を兩斷する愚を敢てするものは、次々に襲ふ狼の爲めに忽ちやられてしまふさうで、惡戦苦闘數刻其の中に人家近くへ來れば漸やく退散して危地も脱する。訥々と語り終へて微笑む池地隊長の姿、長髯をしごいて劍舞に北滿を呑む大河原中尉、國境の裏面を語る加藤中尉、酒も盡きて宿舍を出るとアムールを渡る河風は身にしみて寒い。(續く)